

上和白の氏神 大神神社

鎮座地 福岡市東区高美台二丁目式十四番号

御祭神 おおものぬしのかみ
大物主神

大和の国一の宮、おおみわ大神神社の御祭神、かんじょう大物主神を勧請し奉る。

御由緒 仲哀天皇（14代）の皇后、じんくう神功さま、御征西の節、大和（奈良）の将兵この地に、兵をとどめた時、奈良からお迎えした神様。

永禄10年9月8日、宗像大宮司氏貞、このみ許斐左馬大夫氏備の軍勢が和白に討って出て近辺を放火した。立花城代、ぬるゆ怒留湯入道は馳せ向かって攻め合い、両方共二百余人討ち死にしたという。夕方になって、宗像の軍が許斐岳へと引きとると、怒留湯は夜営し、翌9日、立花たじまのかみあきとし但馬守鑑載と共々立花城へ帰陣したという。この時、怒留湯が宿陣した所が、和白の山上に陣所の跡として残っているとのこと。[筑前国続風土記による]



大神神社の参道正面

大神神社造営記念碑

鎮座地の和白町大字上和白字宮前四九五番地は、福岡市の町名変更により、福岡市東区高美台2丁目24番1号となったが、その周囲は団地化し昔の面影を留めない。この時、神



造営記念碑

住の森蔵を保持するために氏子一同赤誠の浄財をもって神域の一大整備を行った。

神域の境内は当初291坪であったが、明治41年、国有林300坪の払下げを受け、更に隣接地を入手し、神社有地総面積約2056坪（6799平方米）となった。

古来度々再建または修理して今日に及ぶが、昭和39年拝殿東側に埋立て工事を施工し、鉄筋コンクリート流れ造り、瓦葺神殿

1.5坪、中殿2.5坪、渡殿5坪、内陣、更に拝殿の移転新築等々、氏子一同赤誠の浄財をもって殆ど完備した。翌昭和40年4月18日、厳粛且つ盛大裡に御遷宮奉祝の儀が執り行なわれた。

『...右の趣旨に基づき氏子120名の氏名を刻し、大神の御前に奉る。氏子繁栄 昭和51年10月吉日 大神神社 氏子中』



大神神社の御神殿

宮前一号古墳（高美台2丁目）

位 置 大神神社境内、旧神殿跡地のうしろ

この古墳は、西暦6世紀末に作られた墓と推定され、今から約千四百年前に築造された横穴式古墳である。昭和45年、高美台団地造成に先立ち福岡市文化課の手で発掘の結果、かつての昔、盗掘されたものの、今もなお古墳内部に残された品物から、武人の墓と想像され、馬具、直刀、黒曜石の矢じりの他、金環、土器の出土品やガラス玉、水晶の切子玉等38個が発見された。

更にまた、団地内には登り窯、古代製鉄所跡、古墳8基も発見されたことから「大和の将兵が駐在の折、大和の国一の宮大神神社を勧請したるものと伝う」の御由緒と機を一つにする。



宮前一号古墳

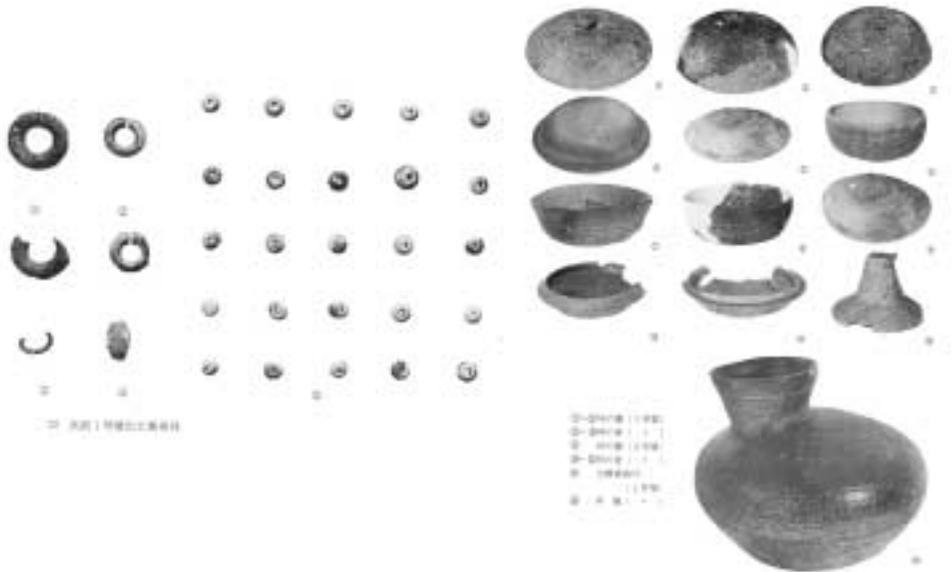
この1号古墳の位置は、旧神殿跡地に係っていることから、当地の氏神様に関係ある古墳ではないかと思われる。(宮前古墳の碑文より)

上和白 古墳時代（6世紀後半～7世紀）

上述の1号古墳を加えて宮前古墳（3基）高見古墳（4基）猿塚古墳（1基）及び和白ゴルフ場内の3基を加えて11基発掘されている。

当古墳の特長

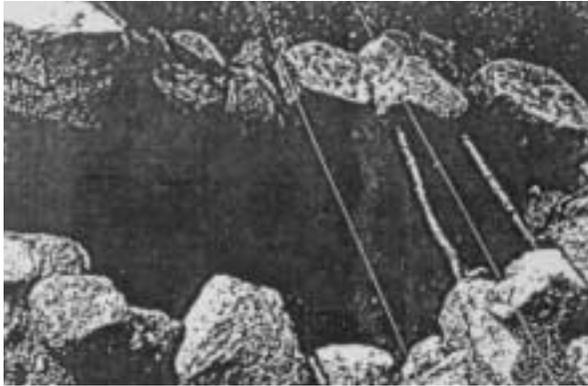
古墳についての福岡市文化課の報告によると、他地区に比し、馬具類が多数出土していることから、武人の墓と考えられ、然も世襲の武人の軍団ではなく、軍事的な目的を持った集団であり、発掘された武器類は誠に簡素で実戦的である。年代的には、6世紀の後半から7世紀までの約150年間の遺跡であり、さらに今から約1500年前の古墳でもある。



宮前一号古墳の出土品（金塊、まが玉、なつめ玉、土器）



高見古墳玄室、第三号墳



高見古墳玄室



宮前第三号古墳案内板



古墳の終期か、製鉄跡地の発掘始まる（昭和46年6月）

この時代の日朝関係

「神功皇后、御征西の節、大和の将兵、この地駐屯の折、御祭神を勧請し奉る」との御由緒を頭に思い浮かべながら、今から約1400年前ごろの日本と朝鮮半島の間を見れば、

- 527 継体天皇、近江毛野臣、衆6万を率いて、新羅に破られた任那^{みまな}を救おうとする。筑紫の君、磐井は近江臣の兵をさえぎり、筑紫の御井に於いて戦いに敗れる。[古事記・日本書紀]
- 528 その子葛子、死罪を免れるため、粕屋屯倉^{みやけ}を奉る。[古事記・日本書紀]
- 532 任那の金官国、新羅に降る。[三国史記]
- 536 （宣化）諸国の屯倉の穀を筑紫那の津に運ぶ。[日本書紀]

562 新羅、任那官家（加羅諸国）を支配する。[三国史記]

591（崇峻4年） 新羅討伐に派遣された2万の軍隊は筑紫に滞留。595年、推古朝になると約5ヵ年駐留の上引き上げる。

600（推古8年） 再び新羅攻撃を計画し、境部臣（馬子の弟）を大將軍とし、万余の兵力で遠征。新羅は白旗を揚げ、南加羅等六城を返還した。[日本書紀]

602（推古10年） 来目皇子（^{くめののみこと}聖徳太子の弟）軍衆2万5千人を率いて筑紫の島部にいたる。渡海準備中発病、翌603年2月ご逝去。

603（推古11年） 聖徳太子の異母弟、^{たいま}当麻皇子を派遣するが、渡海中止となる。[日本書紀]

623（推古31年） 新羅の調（みつぎ・税法の一種）を催促するため、日本軍渡海。



朝鮮半島 任那の金官国（532年）

662（天智1年） 8月、阿曇比羅夫、豊璋に兵力5千人、矢10万、糸500斤以上の多量な軍需品を送る。

663（天智2年） 3月、上毛野君、^{はしひと}間人連巨勢、阿部引田臣、大宅臣計2万7千の出兵。8月27日～28日、日本の水軍は唐の水軍と^{はくすきのえ}白村江に戦って大敗する。

664（天智3年） 対馬、壱岐、筑紫に^{さきもりとぶひ}防人烽を置き、更に筑紫に水城を築いて外敵に備える。

以上を概観すると、6世紀後半は任那の回復に、7世紀は百済の救済に併せて任那（加羅諸国）の奪回を図り、特に7世紀に入れば、次々と万余の兵力を博多湾沿岸に集結、出動するも、遂に大敗、敵国の侵入に備えて防備を固めたが、敵は常に新羅国であった。



筑紫の水城（堤防）

香椎廟創建

723（養老7年） 神功皇后の御神託により聖武天皇の724（神亀元年）に香椎の地に、香椎廟を創建する。

和白郷 大神大明神

香椎ノ宮旧記（730頃か）に、和白郷70町、三苦郷70町、三代郷30町、原上郷40町等々があり、その後、龜上天皇の文永5年（1268）4月4日、詔ありて当宮の修復料として豊後国豆田に200町の田地を給った。「和白」の地名、古文書に初めて見える。

「神祇記聞」に、香椎の末社として古宮大明神、武内大明神、大神大明神、志賀大明神、六所権現、二神大明神等々13の末社名あり。

737（天平8年） 香椎宮に新羅の無礼を奏上、筑紫人に壱岐、対馬を守らせる。

759（天平宝宇3年） 6月、太宰府に新羅討伐の用意をさせ、9月、新羅征討のため、諸



香椎宮本殿

国に船500艘を造らせる。博多大津と、博多の名がはじめて正史に見える。

761 船393艘、兵4万7千人を動員し、訓練する。

762 11月、香椎宮に奉幣し新羅征討軍を訓練する。

768（神護景雲2年） 2月、筑前に怡土城をつくる。

774（宝亀5年） 3月、新羅大使、太宰府に着くも無礼のため退ける。4世紀以来、8世紀に至るまで、なお新羅国を敵国視し、上京を許さず。

804（延暦23年） 第11回遣唐使に従い、空海、最澄の二僧侶入唐。翌805年、最澄（伝教大師）花鶴ヶ浜に上陸し、立花山に独鈷寺を創建。彦四郎の上府に滞在中、その間に三苦を訪れて、般若寺を建て木佛を残されたと伝う。



最澄と千年家（横大路家）

立花城をめぐる攻防戦

1330（元徳2年） 豊後の大友家6代目、大友貞宗の嫡子左近将監貞載、立花に城を築い

て立花を氏とする。二代目左近宗匡、三代目山城守親直、四代目因幡守親政、五代目兵庫頭宗勝、六代目左近将監鑑光、七代目但馬守鑑載（道雪）[戸次軍談による]



立花城の石垣

1567（永禄10年）9月8日 宗像氏貞、許斐左馬大夫氏備も大友に叛き、毛利に心を寄せて立花城を攻め、立花鑑載、怒留湯融泉と団の原にて戦うが、敗れて赤間城に退く。[筑前国続風土記]

和白の戦い

1567（永禄10年） 上下両村に分かれる。永禄10年9月8日「宗像大宮司氏貞、許斐左馬大夫氏備が勢、ここに打ち出で、近辺を放火す。立花の城代、怒留湯入道、馳せ向かって攻め戦う。双方討ち死にの土雑兵共に二百余人あり。黄昏に及んで宗像、許斐岳を目指して引とりければ、怒留湯はその夜、和白に陣取って、翌9日、立花但馬守鑑載と同道し立花城も心もとなしとて、帰陣しける。この時、怒留湯が宿陣せし所にや、和白の山上に陣所の跡残れり」[筑前国続風土記]

1568（永禄11年） 2月、立花但馬守鑑載は大友に反し毛利に通じた。「西の大友」と重視されながらも、大友宗麟の悪逆無道なことを怨み、反大友の高橋鑑種に付いた。4月6日、更に毛利軍の清水、怡土の原田、鑑種の衛藤尾張守の援軍を得た総勢一万余の軍勢は立花山の東西両城に溢れた。山中の各所に兵力を分散させ、周辺の村落にも防御の陣を布いて大友の攻撃に備えた。[筑前戦国史]

4月24日、戸次、吉弘の大友軍は兵力三万余を以って、3ヵ月に亘って攻め立てたが、その守りは強固であった。鑑載は策を立て、立花方の重臣、野田右衛門大夫の裏切りを得て城中になだれ込んだ。無念の鑑載は従者十数名と共に、新宮方面に逃れようとしたが果たせず、遂に青柳の孤崎で自害して果てたという。



筑前戦国地図

1569（永禄12年） 毛利の軍勢は宝満の高橋鑑種の救援も兼ね、立花城攻略のために三万余の陸上軍と四百艘の兵船をもって、4月、赤間、青柳方面及び香椎ヶ浦、和白湯、新宮浦、花鶴浜より続々と上陸して立花城へ進撃包囲を開始した。立花城の三城将からの急報を受けた大友軍は、佐嘉の龍造寺と急遽、和を結び、急ぎ反転。四万の兵力をもって博多付近に集結し、立花城を占拠した毛利勢と多々良川をはさんで対戦すること6ヵ月に及んだ。（中略）11月、突如、本国の毛利元就の命「全軍、急ぎ本国へ」の報を受け（詳細省略）震まじりの11月5日、寒風下に毛利全軍決死の退却をしたが、追撃の大友勢に討ち取られた首級は3,491に及んだという。[筑前戦国史]

上和白の大神神社は、永禄10年の戦いの時、兵火にあったという説もあるが、もし兵火にあったとすれば、永禄12年若しくは永禄11年が正しいのではないか。

立花道雪、立花城督となる

1571（元龜2年） 正月、戸次鑑連^{あきつら}、筑後赤司城より立花城に着任し、この後、立花姓を名のり、号名と合わせて「立花道雪」と称す。所領、表粕屋（48ヶ村）裏粕屋（38ヶ村）^{むしろだ}筵田郡（8ヶ村）^{あじさか}三井郡鱒坂、山鹿郡小坂、三池郡新開、玉名郡小島 与力衆21組、麓衆・院内衆・奈多衆・三苫衆・池田衆・土井衆・多々良衆・八田衆・薦野衆・西郷衆・筵田衆・三代衆・原上衆・山田衆・上下府衆・米多比衆・江辻衆・猪野衆・久原衆・筥崎衆。

うち、麓衆とは立花城をとり巻く下原、平山、和白を指し、立花口は立花氏の菩提所、養老院（梅岳寺）があるため院内衆と呼ばれた。

道雪公、大神神社に燈明田奉納

1571（元龜2年） 「城主立花道雪公より燈明田二反八畝十歩御寄付ありたりと」[大神神社碑文より]

[上和白村文書] 明和9年（1772）の名寄帳に「とふる田1反4畝5歩」「とうろう田1反4畝5歩」とあり。現在、神社の東南約300mの所にあり、但し終戦後の法改正の結果か、現在ゴルフ場敷地となる。

大友勢、耳川の戦いに敗退

1578（天正6年） 11月10日、大友勢は耳川の戦いで島津軍に惨敗する。そのため、大友の大將11人、三老七族ことごとく戦死、島津軍の得た首級3,500余級に及んだという。[西国盛衰記より]

道雪、止むなく龍造寺と和議を結ぶ

1579（天正7年） 耳川の大敗を知ると、龍造寺、早良郡を侵し博多に今にも迫らんとする勢いとなり、道雪は止むをえず、博多筥崎の浜において和を取り交わし、筑前15郡のうち西南部の9郡を龍造寺領に、東北部の9郡を大友領とすることで、和議成立した。[筑前戦国史より]

冬、志摩の柑子岳城督、大友の木付鑑実、城を開き立花城下の角の坊に入る。志摩の小金丸氏（虎政）も、木付鑑実氏と行を共にし立花城に入城したと思われる。

参考 「立花道雪公に仕えて大功あり」の文にはじまる家系図は誠に多い。事実、道雪公、立花城に入城は、元龜2年1月（1571）である。

立花、大塚、五重塔、立花井

1581（天正9年） 「立花と申す所に、古き大塚あり、その脇に、五重の塔あり。何某の墓と知らず。古老の言い伝えに、中国勢、立花城に攻め寄せんとて山に陣どる。立花道雪公も又、ここに陣をとり城を構え給う処、今も立花^{りゅうげ}と^い伝^はなり。この下に井土^{いど}あり。その時、大石を持ち寄り築き上げ、陣屋の用水にとり給う。それ、立花の井土と申し伝う。立花の下に勢を整えたる故に、ここを陣造りと申し伝う」[小金丸 古文書より]

小金丸友吉氏懐古談 1926（大正15年）頃までは、立花の攻城跡の高台に、古墓二十数基が並び、その西下に、大正6年建立の「字高藤溜池増築記念碑」も立っていたが、昭和初年の耕地整理の際、この高台を切り崩し耕地用土に使ったので、記念碑は氏神様へ、五重の塔は明覚寺へ奉納・移転し、その跡地には現在の「上和白公民館（現、和白東1丁目、2丁目公民館）」が建築された。

1587（天正15年） 「小早川隆景公、名島を居城とし給う後は、和白の攻城は畠となる。慶長5年（1600）黒田長政公、入国遊ばされ、翌6年9月、江良久左衛門殿御検使の結果『百姓居屋敷』と仰せつけらる」[小金丸氏文書]

1588（天正16年） 6月15日、立花宗茂公は立花城を離れ、6月17日、全員柳河に入城した。「立花^{むねとら}統虎公、柳川に御移封に当たり、虎政、請うて農人となり、姓を改め小金丸と称す」[小金丸氏家歴伝による]

龍華山 明覚寺（浄土真宗）

（寺地）東区和白東一丁目36-6

（宗派）浄土真宗 本願寺派

（由緒）1588（天正16年）立花城主 立花宗茂公が柳川に移封されると、家臣の小金丸主税之丞虎政は請うて和白の地に下野（農人）した。その子の久左衛門（宗白）は、当時、小字立花^{りゅうげ}にあった一草堂を再興し自ら開基となる。1647（正保4年）寺号、木佛を許され、立花に因んで龍華山・明覚寺と称し、仏堂、方三間半と^い伝^はえられる。現本堂は、1888（明治21年）4月、第十世圓乗師の代に再建されたもので、六間四面、^{くり}庫裡も相前



明覚寺本堂

後に建てられた。[福岡県寺院沿革史による]

思わざる敗戦に茫然自失、敗戦後の混乱の中に、明覚寺の住職第十二世 釈仁性師は、和白公民館運営審議委員として、更にはすすんで青少年育成連合会長として青少年の非行防止と健全育成に地域活動をされた。



明覚寺正門

1958（昭和33年） 時代の要請に応じ、境内墓地として納骨堂を、第一棟、第二棟と建設された。

1975（昭和50年） 親鸞聖人御生誕八百年祭をよき式典として懸案の庫裡くりの改装を行い、聖人ご尊像、梵鐘等の寄進を受け建立整備された。

1980（昭和55年） その都度の修理では最早や無理といわれている本堂は、1888（明治21年）建立されてから百余年を経ており、この修復を門信徒と共々に努力された。

1990（平成2年） 明覚寺の隣接地に団地造成の市計画があることを聞き、この機会こそと、境内内貫通の里道購入 明覚寺の正門確定の必要を痛感し、境内拡充整備を完成した。

故岩崎三男氏の参拝記 「筆者、一日納骨堂にお参りした時、納骨堂ならず涅槃堂ねはんどうとの正式の名を知り、涅槃とは『生死の因果を離れ、すべての煩惱を滅し、如来の法身に帰一する』の語、誠に誠に、佛縁の有り難きを味合い得た一日であった」

2000（平成12年） 前住職 第十二世 釈仁性師は1951（昭和26年）から2000（平成12年）まで約50年間にわたり、若年より法灯を受け継がれ、門信徒の教化に、また数々の事業を成し遂げられ、明覚寺を守ってこられた。平成12年5月14日、継承報告法要式典により第十三世住職 釈英明師に引き継がれた。



納骨堂

湯谷山薬師堂

御本尊 薬師如来（行基の御作と伝う）



湯谷山薬師堂

1592年 文禄年間（1592～1596）「盗人、夜もすがら、歩み、最早十里も行かんと申ししに、宮の森をめぐるのみ、遂に村人に取押さえられしと相伝う」薬師堂の横に「一字一石塔」があり、安永3年（1774）の年号が刻まれている。表には「奉納丈乗一部一字一石塔」と記され、裏には「還山自休居士謹書 俗名 当村在安河内孫右衛門」の刻書が入った自然石

もある。明治5年（1872）上和白村抱、薬師山御林〔薬師山 三反 60本（庄屋）安河内孫三〕とあり、薬師堂の手洗鉢に安永6年（1777）当村若者中との刻名がある。

更に薬師堂棟札二葉、一つは再講薬師堂一字（文政11年）庄屋 孫次 大工 小金丸善七 木挽 安河内喜六とあり、もう一枚には、再々講薬師堂一字（昭和29年3月吉日）（部落長）岩崎親雄、（大工）相場愛喜とある。



一字一石塔

地蔵堂（薬師堂の隣）

もと、故船越博氏宅の北側に祭られていた由。

弥勒（ミロク）菩薩堂

筑前国続風土記拾遺に「村の西にありミロク田という田字あり」とある。現在、和白東一丁目30-18の岩崎巖氏宅前に祭られている。

地蔵堂（小金丸清氏屋敷内）

「たちえ」「延命」「ひぎり」地蔵尊三体は、現在、和白東一丁目32-18の小金丸清氏（故人）の屋敷内に祭られている。

上和白の石像物のお話

詳しくは資料編を参照

和白東二丁目（中和白の西より）の石像

庚申尊天（和白東二丁目）

1750 [寛延3年3月7日刻名]

和白東一丁目より、この集落に入る三叉路に「大木戸」と言われる道幅の広い道路がある。その傍に、明治末年まで、祭られていた庚申尊天である。現在は「明治40年3月、安河内邑次郎建立」の石塔と共に、旧より3m程の安河内鹿良氏（故人）塀内に安置されている。



観音堂（和白東二丁目）

観音堂（和白東二丁目19）

聖観世音菩薩が祀られ、粕屋郡北部新四国千人祭り、第71番札所とあり、御堂前の奉寄進の石灯籠には、天保13年（1842）の年号が刻まれている。

観音堂前は、南向きで風光明媚の広い台地があり、更には、御堂近くに下和白等へ通ずる山道があること、「大木戸」「三叉路でない場所に庚申塔」「観音堂」など、考え合せる時、我々の知らない昔に、纏まりのある集落があったのではないかなどと想像する。

六地藏（和白東二丁目21-18）

現在、安河内 勝男（故人）氏の邸内に、祀られてあるが、お話によると、以前は、字古賀堀におられた由、先代の安河内外蔵さんがお話しておられた。



安河内勝男氏邸内の六地藏

和白東二丁目（中和白の東端）の石像

庚申塔「享和三年（1803）八月吉日中和白若者中」とのように、約200年前は、中和

白の東端、は大蔵池（原上方面）へ、には、大神神社經由下原へ、には、「中和白の山道」經由下和白への三叉路に祀られてあった。同じ位置に建立の日清日露戦記念碑（明治43年11月建之）も、建立されていたが、現在は大神神社の境内に移築されている。

幸神天〔寛政12年（1800）庚申10月連中〕さんは、故安河内八郎氏の邸内の庭にひっそりと祀られている。



庚申塔

貴船神社（貴布祢宮）



貴船神社

貴船神社の再建は早く、古くから「藤の森」「西の宮」と称され、同境内の自然石の庚申尊天（享和3年）、手洗鉢には宝暦2年（1752）の銘の外、文政元年（1818）貴布祢宮御神殿再建（大工）三橋利右衛門、安政5年（1858）の棟札（高さ95cm、幅20cm）木版の裏面には、御祭神の御威徳記載のほか、以下長文を紹介すると

棟札（裏面文）

「そもそも、貴船宮と申すは、人牛馬守護の御神なり、（中略）村人私ども、神を尊び毎月ツイタチ、十五日の日、お汐井をとって参詣します。先年、拝殿のうちを調べましたところ、お汐井砂のため柱根が埋まり、『ウンゾウ』という虫が家の上迄上がり、くち果て候に付き、新規に板張り終わり、年末に六貫十六文支払終わりました。

同年の春 大野畠においてご免踊り、興行仰付。

同年三月 池尻、長裏、免田の三個所の堤（ツツミ）水漏る。普請仰付。

同年八月より、九月半ばまで、戌辰の方に、ホーキ星出で、又、夜の八時頃、丑寅の方にも出

同年秋頃より、長崎、江戸、大阪あたり、コロリ（コレラ）という病はやり、死人が多く出ました。当国ばかり、死人一人もなく、誠にまれなことでした。

同年十月半ば頃、オランダ人博多に参り、太宰府、箱崎に参詣いたしました。

同年霜月廿九日夕、大地震四、五度あり、十二月ツイタチ（一日）夕、四、五度あり、恐縮次第。前代未聞のことであります」

安政5年（1858）の日本歴史年表に「コレラ、長崎に始まり、大阪、江戸と伝播し大惨害となる」とあり、和白の片田舎ながら情報入手は誠に見事。



棟札

上和白村の溜池の古記録

文政元年（1818）7月、御免用普請袖帳〔裏粕屋郡上和白村〕記載の一部では

1. 高見堤 [寛文10年（1670）水掛り12町余]
2. 大蔵堤 [寛文12年（1672） " 504町歩]
3. 松原口堤 [延宝年中（1673～1681）] " 1町余水面積450歩]
4. 宮ヶ浦堤 [延宝年中（1673～1681）水掛り1町余水面積210歩]
5. 高藤堤 [天和元年（1681）水掛り12町余水面積1500歩]
6. 後野堤 [寛延年中（1748～1751）水掛り5町余水面積150歩]
7. 高藤堤 [宝暦年中（1751～1764）水掛り8町余水面積600歩]
8. 薬師ヶ浦堤 [安永年中（1772～1781）水掛り5反水面積40歩]
9. 薬師ヶ裏堤 [安永年中（1772～1781）水掛り6反水面積100歩]
10. 免田堤 [天明8年（1788）水掛り4反水面積30歩]
11. 池尻堤 [寛政12年（1800）水掛り5町4反29歩水面積300歩]
12. 大根ヶ浦堤 [文政8年（1825）水掛り10町余水面積970歩]
13. 免田堤 [天保6年（1835）水掛り5反]
14. ほき堤 [不相知（？）水掛り5反余水面積150歩]
15. 永浦堤 [不相知（？）水掛り3反水面積30歩]

以上書き上げた通り、間違い有りません。以上

文政元年7月 上和白村組頭（嘉吉、藤平、利市）

同村庄屋 孫次

旧和白町で最も古い池は、大字下和白（現美和台）にある四十浦池で、今から約350年前（1650年頃）の古池。二番目、三番目は、大字上和白（現高美台）に現存する高見池で約325年前（1670年頃）、大蔵池は高見池より2年おくれの（1672年）で、四番目は三苦の釘浦池（クギノウラ）。（粕屋郡誌より）

上和白村に塩田（約330年前）

「塩銀上納」と言い、藩に税金を納めていた約330年前ごろの塩田の面積は1町3反7畝歩であった。

自分のうちの塩は自分でとの自給自足の心掛けか、上和白の「汐入、浜久保、浜田、唐の尾」などの水田から、塩釜に使用した「焼け石」が多数出土している。ところが事実、

製塩し納税した確かな証拠として、小金丸種尚氏所蔵の古文書の中に「塩税上納書」が12枚、34ヶ年に亘り保存されていた。その「塩銀上納済証」は、万治4年（1661）に始まり元禄7年（1694）までの34年間は、確実に「塩作り」をしていたが、元禄7年をもって、塩田を水田に造りかえた。

塩田を水田に御成り候之事

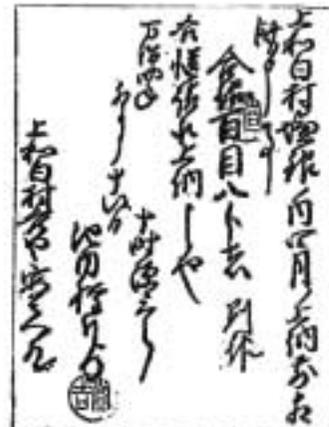
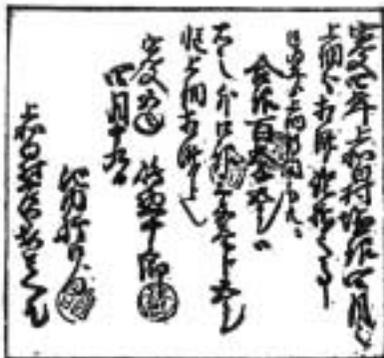
田	数	一町三反七畝歩
浜田内田	数	八反三畝二十三歩
浜田古川開田	数	一反八畝十九歩
沖むた田	数	三反十歩

右は元禄七年戊の七月七日

田尻 彦右衛門様代
伊藤 安之丞 様庄屋 彦三郎



万治、元禄時代の塩田の位置図



寛文四年上和白村塩銀買
上納分相済証之事
但書是書古新州令事
合銀百五文五分
右ノ外御銀三交奉五厘
下ノ上納相済也
寛文五年 嶋 勝十郎
買十石 池田屋 上門
上和村庄屋 彦三郎殿
* 飛川家綱ノ
* 寛文五年(六六五其)
一抄一百五年前

上和白村塩銀百四月上納
相済申す事
合銀百日八分
右ノ上に請取上納申上申也
万治四年 十野 源三郎
買十石 池田屋 上門
上和村庄屋 彦三郎殿
* 万治四年(一六六一年)
* 小金丸彦右衛門(彦三郎)
(別名彦右衛門)

この文書は、上和白村の庄屋、小金丸彦三郎さんが、黒田藩の役人、田尻氏と伊藤氏に提出した書類で、場所は位置図のように和白白川の中流周辺及び下流で、現在の浜田、浜久保、二反田の一部に相当する。更に、沖むた [現在の和白白3丁目(和白白駅周辺)]水田は元禄7年(1694)頃は、上和白分であり塩田であった。

上和白村略年曆（1）

古文書、諸記録中、上和白村に係る重要と思われる事項を記載する。

- 1567（永禄10年）9月5日団の原に戦い、宗像勢敗れ退く、
9月8日宗像勢、和白に進み戦い、夕刻引き退く、
- 1568（永禄11年）立花鑑載^{あきとし}大友に反し戦うも敗れて自刃す、[筑前戦国史]
- 1569（永禄12年）毛利軍、立花城を占拠し、反撃の大友軍と立花城下、多々良川周辺に戦うも、11月本国に変あり、毛利軍寒風下引き退く、["]
- 1571（元龜2年）1月、立花道雪、立花城に入る、
立花道雪、大神神社に燈明田[2反8畝10歩]を奉納す。
- 1578（天正6年）大友勢、島津軍と耳川に戦い大敗す。
- 1579（天正7年）龍造寺の諸軍に対し、道雪公止むなく博多箱崎に於いて和議を結び筑前15郡のうち、西南部の9郡と龍造寺領に、東北部の6郡を大友領とすることに決定、[筑前戦国史]
- 1585（天正13年）立花道雪、三井郡北野の陣中で没す（73才）
- 1586（天正14年）7月、島津軍、岩屋城を攻め、高橋紹運大いに戦い、自害し果つ（39才）
7月、島津軍、立花城下にせまり香椎廟を焼き、秀吉の諸軍来るの報により退く、立花宗茂、秀吉の命により柳川城に入る、
- 1587（天正15年）小早川隆景、名島城に入り立花城を端城とする、
- 1602（慶長7年）黒田長政、江良久左衛門を検使とし来たり、立花出城を百姓居屋敷とする、
- 1644（正保元年）大神神社の御神殿を再建す、[小金丸文書]
- 1647（正保4年）小金丸久左衛門（宗白）龍華山、明覚寺を開山すという、この時、寺号・木佛を授かる[福岡県寺院沿革史]
11月御遷宮（壹貫五拾目）奉納額（十五匁）
- 1661（万治4年）上和白村塩銀上納金たしかに上納候也の領収文書が、この年から34年間、12枚保管されてある、（小金丸文書）
- 1670（寛文10年）旧和白町内、四十ヶ浦池に次ぐ第二の古池[高見池、池面積4反]を構築す、（上和白事績綴）
- 1672（寛文12年）上和白村字大蔵の古田をつぶし、下府村、下和白村、上和白村三ヶ村養水のため溜池を築立（中略）以降三ヶ村は、この養水により生活す、[大蔵溜池築立古文書]

上和白村、下府村、下和白村三ヶ村共同の大蔵池をつくる。裏粕屋第一の大池なり。



大蔵溜池の見取図

- 1672 (寛文12年) 獅子・猿田彦 奉納 (小金丸文書)
- 1681 (天和元年) 高藤池構築 (池面積5反歩) [上和白村古記録]
- 1694 (元禄7年) この年まで34ヶ年間に亘り、納税を果たした上和白塩田の記録あり
- 1695 (元禄8年) 弥勒堂、古くは浜久保の大石の傍に有り、この年に建立すと 施主奈多浦 蔵の名あり、
- 1706 (宝永3年) 大神神社拝殿再建 (大工) 末松九兵衛清久、薬師堂再建 [境内に湯池あり、石佛を番地藏と言ひ伝う] とあり (大工全上)
- 1707 (宝永4年) 旧拝殿手洗石 (若者中) 自然石
- 1718 (享保3年) 庚申尊天 (初期は小字立花の貴船社の境内に創築、現在は大神神社の境内に移設) 昭和2年耕地整理により大神神社の境内に移設する、



神社境内に移設の庚申尊天 2体

- 1720 (享保5年) 大神神社神殿再建 (庄目) 小金丸勘平外6名
貴船神社神殿再建 (庄目) 小金丸勘平外5名
- 1732 (享保17年) 天和2年 (1616) より五代に亘り小金丸氏は庄屋役を相勤め、享保17年 (1732) より明治初年まで安河内氏、庄屋役を相勤むという [小金丸文書]
- 1748 (寛延元年) 大神神社御遷宮祭 (鹿子ふき替) 清原相模守

- 1750（寛延3年）庚申尊天像（3月建立）和白東二丁目大木戸にあり、
- 1752（宝暦2年）貴船宮手洗鉢に宝暦2年の銘あり
- 1755（宝暦5年）高藤池構築（池面積2反歩）
- 1777（安永3年）薬師堂隣に「当村住安河内孫左衛門」の謹写の「一字一石塔」あり
- 1800（寛政12年）幸神天「10月若者中」の銘の庚申天和和白東二丁目東端、故安河内八郎氏邸内にあり、
- 1803（享和3年）庚申尊天「中和白若者中」和白東二丁目東三叉路ありしを氏神様の境内に移す、
- 1783（天明3年）絵馬奉納（氏神様へ）
- 1791（寛政3年）鳥居「施主氏子中」奉献とあり（庄目 安河内直助）
- 1794（寛政6年）大神神社御遷宮（新宮浦 稲光 長門）
- 1798（寛政10年）弥勒堂再建（大工）下和白藤原伝平
- 1807（文化4年）3月、石燈籠（大神大明神）2基（施主）小金丸〇〇〇貞、
- 1812（文化9年）3月、石燈籠（施主）
（施主）小金丸佐吉種久
- 1813（文化10年）3月、石燈籠寄進2基
（施主）安河内〇〇〇資（施主）
安河内利〇〇〇、



大神神社 御神殿周囲の石燈籠

以上、文化4～10年の間の5基は、昭和39年御神殿の移築まで、御神殿の周囲にあって守護された石燈籠である。

本文中の は、早や約150年以上の野ざらしのため、判読不能を示す。

- 1817（文化14年）大神神社井土（井戸）並び、家屋建立（庄目）安河内孫次（大工）三代村三橋利右衛門
- 1818（文政元年）大神神社拝殿再建（庄目）安河内孫次（大工）三橋利右衛門
- 1822（文政5年）大神神社石燈籠
- 1824（文政7年）大根ヶ池構築（池面積3反2畝歩）
2月、石燈籠奉納（大神大明神）2基（施主）船越利平、船越與平

造成作業開始前（昭和44年）までは、拝殿は参道より約13mの高台にあり、その拝殿の前の階段両側に石燈籠を建立。

註)

写真中、2基の石燈籠の間に高低差約13mの石階段があった。また、写真右端の箱型の位置が「井戸」である。



現在の大神神社境内



大神神社見取図（造成前）

1846（弘化3年）石燈籠、（大神大明神）（施主）安河内八〇利〇

1858（安政5年）貴布祢社再建〔氏子中（庄屋）安河内孫三〕再建にあたり、奉納文を棟札に記し奉る（本文P15、16参照）

1873（明治6年）拝殿改築

1875（明治8年）御神殿葺替え奉賛

1876（明治9年）絵馬奉納（石橋山の戦）参宮同行8名

1879（明治12年）拝殿再建（施主）村中（祠掌）稲光稔（棟札裏面文一後記）（大工）秦 喜作

1880（明治13年）1月絵馬奉納二面〔厳島神社、合戦図〕（奉納者）戦地軍夫中43名列記

1883（明治16年）1月絵馬奉納〔四国五台山〕参宮同行3名

1887（明治20年）一の鳥居 奉納（産子中）

1888（明治21年）大蔵溜池築堤（1）紛争経緯（2）嘆願（3）約定6ヶ条〔詳細は本文P33参照〕

1890（明治23年）大蔵溜池の取魚事件9月23日上和白有志取魚のところ、異論あるに依り和白村駐在所原田巡查に訴う。[詳細は上和白事績綴参照]

1899（明治32年）編入願い（大神、貴船両社）

当社土地山林、左記事由により再び境内地に編入
許可下さるよう、実測図を相添え願上候也
（社掌）稲光 稔
（氏子総代）安河内利三郎、小金丸六郎、
小林乙吉、
内務大臣候爵 西郷従道殿
農 商 務 大 臣 曾根荒助殿

[詳細は上和白事績綴参照]

1902（明治35年）大神神社御神殿葺替え（要費用134円71銭）

1903（明治36年）和白尋常小学校新設

2月5日付（発農34号）蚕室、蚕具の件

1904（明治37年）博多湾鉄道株式会社による開通

1905（明治38年）幟奉納（日露戦勝記念8名）

1906（明治39年）薬師ヶ浦山へ日露戦勝祈念林を造林

[明治36、37、39年は本文P35を参照]

1908（明治41年）大神神社境内地拡張（300坪）明治当初の境内面積291坪、明治41年
国有林300坪の払下げを受け、更に隣接地を入手し神社有地総面積6,799平方米
（2,056坪）となる。大神神社の報告文による

1910（明治43年）日清日露戦役記念碑、11月建立

1911（明治44年）新橋架記
念碑（進農会）3月建
立

神社合併願い 貴船神
社を大神神社境内地に
移設



上和白位置図

- 1912 (明治45年) 和白高等小学校跡碑文 [詳細は本文 P 36を参照]
- 1913 (大正2年) 4月拝殿前石段 (16段) 奉納 (初老賀7名)
- 1917 (大正6年) 字高藤溜池増築記念碑 10月吉日 (当初) 上和白公民館玄関附近
- 1919 (大正8年) 拝殿、御神殿葺替え、遷宮際 戦役記念碑 [大正3年～9年 (1922)]
高藤国有林払下げ記念碑 (1923)
- 1921 (大正10年) 宮の前石橋架設記念碑、4月、上和白青年支会、(当初) 氏神に一番近い和白川上流
- 1925 (大正14年) 貴船神社、大神神社境内地へ
庚申塔 (字立花1089)(中和白木戸より) 二体、境内地
遙拝台建立 (61才以上16名)
石燈籠奉納 (小林大右衛門)
- 1926 (大正15年) 6月 縄掛石 (八尋 弘次郎 (旧姓小林))
- 1927 (昭和2年) 7月手洗鉢大石奉納 (安河内宗吉)
- 1928 (昭和3年) 村社へ昇格 (神饌幣帛料受領)
- 1933 (昭和8年) 御神殿葺替 (社掌 稲光種麿)
二の鳥居、4月建立 初老賀 (小金丸重三、三六外8名)
獅子台座、10月、六十賀 (大吉、邑次郎)
- 1942 (昭和17年) 神社裏階段 (コンクリート) 初老賀 (7名) [紀元二千六百二年]

筑前竹槍一揆

1873（明治6年） 福岡県の人口約43万人中、一揆参加者約30万人

当時の上和白の戸数62軒、一揆参加者73人

明治6年6月16日、嘉麻郡高倉村から発生した農民の一揆は、筑豊を初め宗像、粕屋と全県下30万人を巻き込み、博多・福岡部、県庁になだれ込む大紛争となった。「上和白事績綴」の中から上和白の一揆のことを一部紹介する。

上和白の保長からの報告書（その1）

明治6年7月 十七小区 粕屋郡上和白村

「今般、党民一揆を相おこし、附和随行しました人々を報告します。

農 安河内利市（当29歳）	農 安河内喜代吉（当14歳）
“ 安河内利吉（“46歳）	“ 安河内 惣三（“23歳）
（中略）	（中略）
農 小林 藤六（当31歳）	農 相場 茂三郎（当32歳）
“ 船越 友吉（“17歳）	“ 小金丸兵次郎（“35歳）
“ 杉谷 市平（“26歳）	“ 西ノ宮 小七（“48歳）

自分の儀、附和随行いたしましたこと間違いありません。（以上41名）」

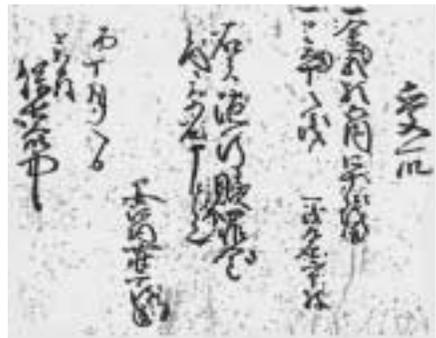
附和随行（フワズイコウ）＝あまり深い考えもなく、ただ、他の人と共に行動すること。「大変よく考えて行動した」と報告したら罰が益々重くなる。

農 船越 與蔵（当46歳）	農 小林 次助（当50歳）
“ 安河内権平（“56歳）	“ 杉谷 弥助（“58歳）
保長 安河内準七（“45歳）	保長 小金丸三郎（“43歳）
農 黒木和一郎（“18歳）	山見回役 森伴七（“51歳）

自分の儀、村の火の用心取締りのため、外に出ていません。（以上32名）」

以上、一揆に加わったらしい者、計73名の氏名・年齢・職業だが、当時の上和白村戸数62軒に対し一揆参加者は73人と多い。

調査の結果、県下の処罰者6万3千余人のうち、罰金刑5万2千余人、「尻たたき刑」の体罰1万1千余に決定したという。「上和白事績綴」によると、計133円45銭以上を上和白村が罰金として支払うことになったという。



証書

- 参考 明治6年頃の米一俵(3斗3升)代は1円30銭。
大人(15才~59才)1人分の罰金は2円25銭、15才未満は75銭。
一金 百参拾貳円七拾五銭 16歳より59歳まで(59人分)
一金 七拾五銭 15歳未満(1人分)
計 百参拾参円五拾銭
体罰は「尻たたき」で、一人当り70回であった。

上和白明細書上

1875(明治8年)

○戸数62軒(農業168人)

○人口293人(15歳~59歳181人)(14歳以下、60歳以上112人)

明治8年の上和白の区域を、今に直してみると「高美台、和白東1.2丁目」「和白二区」「和白三区」「和白四区の3/4」の広い区域内に昔は戸数62軒だけだった。

○俗 10年以前より善

○村中 盛 10年以前より勤勉

○作方(下) ○患(難)

他村よりの作方(田)10町4反歩(畑)1町6反歩

○他村抱作(田)これなし(畑)なし

○1日貢租米大豆274石2斗4合

○牛馬数(牛)64疋 (馬)これなし

○民林旧反別(14町4反5畝)秣場(8町8反歩)

○餘楽 ○小学校(盛、これあり)

○水源川(これなし)養水溜井水(9歩)出水(1歩)

○福岡里程(4里)博多里程(3里15丁)

○産物 棉(一千斤、15石)

右の通り書上申候也

明治8年4月

第三大区上和白村

(保長) 小金丸三郎

(副戸長) 安河内莊二郎

御免用出夫状況

郡役所、村役場などの申し出に、人夫をさし出した状況（回数、人数、場所）

1876（明治9年） 3月の御免用出夫（公用のため人夫出し）觸帳に記載の三十数回のうち12月までの主要出夫を書きだすと、

3月 / 21日	上府村、炭かぶり	54人
4 / 4	立花口村、裏谷普請	54人
4 / 13	立花口村、裏田溜池	54人
4 / 16	志賀嶋村、焼岸除	54人
5 / 13	下府村、間道筋土橋材木 [官林より]	
5 / 30	青柳町、楼泉寺	57人
10 / 22	大蔵溜池井樋	58人
11 / 4	人夫50人内30人縄持参 [明5日6時]	
	20人同上 [明6日6時]	
11 / 29	三代村、新堤堀除に午前6時	64人
12 / 3	下原村、池田	58人

以上のように、田植え時期・収穫時期を、はずした外は、毎月の出方は月に2～3回、しかも他村への奉仕作業が大変だったと思われる。更に明治10年から御免用人夫届出しは、一段と念を入れた報告をしている。

1877（明治10年）

面役名簿を作成し提出、雑形の通り氏名、年齢を記入ありたし。

安河内久市	44	安河内与吉	37	小林長兵衛	28
安河内善兵衛	29	安河内孫左門	28	小林 栄蔵	30
安河内虎吉	18	安河内利三郎	25	小林 藤六	36
相羽 安蔵	45	相羽百太郎	17	船越 利助	49
船越 幸助	44	小金丸三郎	48	小金丸甫三郎	50
小金丸六右衛門	27	小金丸作次郎	46	岩崎兵次郎	41
花房熊五郎	25	杉谷 市平	32	小金丸大淳	27
栗生 弘	42	本田 馬吉	18	小金丸 暢	30
… … …		… … …		… … …	
… … …		… … …		… … …	

以上 計81人 出夫できる人数68人

差引き 13人（出夫より除外の人々の内訳は次の通り）

（保長）小金丸三郎 （伍長）藤三郎、利三郎

（使夫）小金丸勝蔵 （痲疾）2人 （割愛）

[僧＝他府県へ] 暢、大淳 （教員）熊五郎、馬吉

（他町村へ）徳松、作太郎、利八

五小区役所御中 明治11年9月20日

上和白村（保長）小金丸三郎

地 券（土地所有権証書）

「地券」を辞典などで調べると

「明治5年、地祖を改正し、以後、土地所有者を検査の上土地所有権を証明した証券（地券）を交付す」とある。

1．約110年前の「上和白記録綴」を調べた結果、「上和白村分」地券が31枚保管されている、以下一部を報告する。

秣場（マキバ）として8枚 [長浦、ベフンノ、竈土、左山、野辺]

稲干場として8枚 [岡田、大蔵、六反間、高見、高田]

池、（8枚）[高見、大根ヶ浦、宮ヶ浦、松原口、池尻]

耕地として6枚 [左山、竈土、白浜、薬師ヶ浦、宮ノ前]

林、（5枚）[薬師ヶ浦、白浜、宮ノ前]

墓地として3枚 [竈土、長畑、梅ヶ崎]

他 ア、境内 [薬師ヶ浦] イ、野原 [新開]

以上、31枚の地券は下掲の通り、

更に「上和白の農業」の文と併せ一読、比較検討していただきたい。



地 券



上和白事績綴

西南の役

史実では、明治10年（1877年）2月15日 西郷隆盛ら、兵を率いて鹿児島発

2月22日 熊本城を包囲

3月20日 田原坂の戦い、

3月28日 福岡県士族越智彦四郎ら反乱、

9月24日 西郷隆盛自刃（西南の役終る）

となっているが、明治12年10月の大神神社拝殿再建の棟札には「明治10年1月、薩摩、日向、大隅三国の賊たち、西郷 桐島を大将として肥後の国まで出張朝敵す。鎮台多数繰り出し討ち死に数知れず」とある。

参戦記念奉納額

大神神社の参籠殿に2枚の絵馬が掲げてある。川中島の合戦かと思われる絵馬と巖島神社の絵馬で、明治13年（1880年）1月奉納、「戦地軍夫中」と奉納者は書かれ、額縁の下段に43名の氏名が刻まれている。

その氏名は次の通り、

安河内仁三郎、船越与藏、安河内勝平、安河内市藏、小金丸茂藏、相場宗兵衛、相場安藏、安河内与吉、小林藤六、安河内利右衛門、船越与平、小林栄藏、安河内恵吉、安河内重藏、安河内和藏、安河内惣三、小林長兵衛、安河内孫兵衛、安河内徳藏、小金丸宅兵衛、小金丸六右衛門、杉谷喜助、安河内伊藏、安河内八平、小林勘三郎、安河内利三郎、小林栄次郎、小金丸圓、安河内伊十郎、安河内伊三郎、安河内利兵衛、安河内喜一郎、小金丸嘉一郎、小金丸徳三郎、小金丸菊三郎、安河内源三郎、小金丸吉三郎、杉谷弥助、船越久左衛門、岩崎安平、安河内甚三郎、安河内藤次郎、小金丸勝藏、

これらの人は、明治10年（1877年）西郷隆盛の西南戦争の際、食糧、弾薬等の輸送に当たる軍夫として上和白から「軍夫募集」に応募された我々の先祖の方々である。

戦争も一応終わり、共に軍夫として戦場で働かれた人々が、氏神様に絵馬を奉納して無事の帰還を祝い、戦場での手柄話に花を咲かせたことだろう。



参籠殿の絵馬（1）



参籠殿の絵馬（2）

国道更生路築道と感謝状

1878（明治11年） 10月20日郡役所開設

郡長（権藤貫一氏）着任

1879（明治12年）国道第三等更生路築道

[明治12年9月13日付 役所の觸（出方）文書

明9月14日午前第6時、古賀町中川までに、寸志夫（志ある者）69人、唐鋤、平鋤、払籠及び斧（オノ）を3～4挺持参のこと。

更に9名増、計78名

大神神社拝殿再建（明治12年10月）の棟札に「（中略）明治12年8月頃より、濱男以東赤間駅まで更生道を築造するので、上和白の寸志夫、三交替で土木しました。上和白地域のうち、潰（ツブレ）田、畑、林の面積5反7畝22歩は、地価で買上げとなり、明治13年落成致しました」と、上和白の先祖の方々が再三にわたり、つとめて土木された姿がうかがえる。

1881（明治14年） 感謝状

赤間駅以西、更生道路築造費として、金四拾壹円四拾銭寄付候段奇特に付き、その賞、木杯壹個下賜候事

明治14年12月26日

粕屋郡上和白村 殿

福岡県

1883（明治16年）1月絵馬奉納（四国五台山） 参宮同行3名

1887（明治20年）一の石鳥居奉納（産子中）

1888（明治21年） 感謝状

上和白有志 参拾壹名 殿

粕屋郡青柳高等小学校新築費として寄付候致殊勝に候事

明治21年9月28日

福岡県知事 安場保和

大蔵溜池に係わる紛争

1888（明治21年）

知事、区長にも面会の機会の少ない100年以上の昔、バス・電車はもちろん、汽車もない時代（鹿児島本線開通は明治23年）に代表の方々はワラジ、股引き姿で、区役所までの3里（約12km）を歩き、正服に着替えて、区長に4回、県庁には6回の陳情、嘆願をおこなうというのは、今では想像のつかない大変なことだった。

請願・嘆願

福岡県知事宛	3/28 4月 5/15 6月 8月 8/31	6回
粕屋郡長宛	3/28 仮約定取消願 8/14	
	復旧不可の由につき嘆願	4回
戸長並びに戸長役場	4/9 5/1 5/2 5/17 5/20 5/27 5/29 7/4 7/7 10/6 10/21 10/22 10/22 10/30 11/1 11/8 11/8 11/20 12/15	19回
合 計		29回

○知事にまでも嘆願しなければならない理由とは

1. 大蔵溜池完成時の三か村の申合せ

寛文12年、上和白村字大蔵の古田を潰し、下府村、下和白村、上和白村三カ村養水のため溜池を築立、その換地として、下府村、下和白村の古川地内の田、4町2反24歩の飛地を上和白村の抱地とし、以降三カ村は、この養水により生活することになった。

記

筑前国粕屋郡上和白村字大蔵

（潰地）溜池敷地5町7反25歩 田畑7反13歩

（換地）上和白村潰え分を下府村、下和白村の古川の地、水田4町2反22歩とす。

以上のように、上和白村字大蔵は三カ村の養水として共有となっていたのだが、明治8年（1875）地祖改正の際、共同で管理していた大蔵溜池が、上和白村が知らぬ間に、下府村抱官有地となっていた。さらに明治10年（1877）内務省乙第104号の通達に、「町村に点在する飛地、錯雑地は、その所在する町村への組替のことあるも、今尚、組替え進まず、早急に解決のこと、明治20年2月7日 郡長小野隆助」と訓示された。

明治21年3月28日、郡書記の山路圓、渡辺桂一郎らが新宮村矢山権次方に出張、該当

三カ村人民総代を召集の上、錯雑地、飛地の組替えを急ぐべきだと説諭し、捺印を強行したことが発端となった。

嘆願書

福岡県知事

安場保和殿

明治21年8月31日

筑前国粕屋郡上和白村

人民惣代

安河内利三郎 安河内孫右衛門

小金丸六右衛門 小林長兵衛

安河内藤次郎 船越 伊吉

知事への嘆願書（最終嘆願6回目）の全文は、候文、墨書であるので判読は如何かと考え、以下に要点を列挙する。（詳しくは神社書庫を利用）

寛文12年（1671年）溜池完成時の申合せにより「三カ村養水供用」としてこれまで仲良く今日に至ったのに、

1. 明治8年地租改正の際、上和白村に全然連絡なしで「下和白村抱官有地」と書き替えていること、
2. 明治10年以降「地券証」授与のことも、迫っていて一大事であるというのに、
3. 以前の通り養水利用は三カ村供用だと要請したが回答もないので、知事の方で何卒.....

明治22年二カ村（下府村、上和白村）の嘆願書は却下された。明治30年8月7日、郡長吉田佐七郎の面前において郡主任、書記及び三カ村長、村惣代立会いの上で約定を取結び、後日、「異変これなく、証書三通をつくり... 更に約定6ヶ条を手交す」こととなった。

以上、明治21年3月より10ヵ月にわたり県庁、郡役所のみでも10回の陳情・嘆願したが、残念ながら両方共陳情書却下され、それから約8年後、下記のような約定書で終わった。

約定書

粕屋郡新宮村大字下府字大蔵飛地溜池、和白村大字上和白字古川と地所交換し、大蔵溜池の件につき、すぐる明治21年3月28日仮約定取結び居り候処、今般下府及び上和白、下和白各人民立会い仮約定書に基づき、本約定を取結ぶこと下記の如し、

第一条 上和白地内にある字大蔵溜池は下府において従来通り諸事取締り扱うとも上和白にては聊かの苦情之れなき事

第二条 大蔵溜池の下に係る字大蔵浦田の水路は将来下府に於いて単独に相当の修繕

を施すといえども、上和白においては聊かの苦情之れなき事

第三条 溜池に係る工事は下府において出願するときは、従来の通り上和白の意見を伺うこと要せざるを以って、下府において直ちに相当の手續きを経て出願をなす事

但し、場合においては、その都度、上和白において諾否を申立ての権能なき事

第四条 溜池余水吐きの石張工事は下府において出願の上許可を得、工事に着手するも上和白にては毫も故障申出、申すまじま事

第五条 溜池下に係る上和白地内字大蔵、浦田、高松の田地は従来の慣例により該溜池、分水するも下府及び和白村大字下和白に於いて聊も苦情之なき事

但し、該溜池工事に係る費用は従来の例により上和白地主よりは出金せしめざる事

第六条 和白村大字下和白への分水は従来の慣行により別に約定を取結ぶべき事

右各条は郡長吉田佐七郎の面前において、主任郡書記及び両村長立会約定取結び候間、後日異変これ無きため、証書三通り作り、双方村長並びに惣代各署名捺印し互いに之を交換し、尚書通は郡役所へ差出し申すべく依って約定書

如件

明治三十年八月七日

福岡県粕屋郡新宮村

村長 安武永太郎

福岡県粕屋郡和白村

村長 堺千代吉

全県全郡新宮村大字下府人民惣代

有光荘十郎

森幸助

井上卒三郎

富永與蔵

高野文蔵

全県全郡和白村大字上和白人民惣代

小林長兵衛

安河内藤次郎

安河内虎吉

小林乙吉

全県全郡和白村大字下和白人民惣代

安河内惣三

以上が、明治30年8月締結の「約定6ヶ条」。誠に残念な結果ではあるが、先輩諸氏のご苦労と骨折りには心より感謝申し上げたい。

1890（明治23年）9月大蔵溜池の取魚の事件

1891（明治24年）早魃、雨乞いの申合せ

- 1.豊後の国への雨乞いに行く人の外は氏神様へ籠ること。[6月21日より25日まで]
- 2.その間の費用は、田反別割とする。
- 3.申合せにより田の草取りは当分の間中止すること、従って協議に違反した者は、田地に分水せず、溜り込んだ水は切り落すこと。

1899（明治32年）大神、貴船両社の編入願（詳細は上和白事績綴参照）

1902（明治35年）大神神社御神殿葺替え

1903（明治36年）和白村和白尋常小学校新設

小学校新築には、各区の拠出金が必要だったのか、「明治34年に始まり明治37年に精算す」と書き、役場に81円也を払い込んでいる。36年竣工。

1903（明治36年）2月5日付（発農34号）として「蚕室、蚕具本日より、自己負担に付き報告のこと」との文書が和白役場にある。養蚕の始まりは明治何年頃のことだろうか？

1904（明治37年）「和白駅、奈多駅共、明治37年1月1日より営業開始す」。博多湾鉄道株式会社によって西戸崎＝須恵間が開通し、石炭列車が走る。

1905（明治38年）幡奉納（日露戦勝記念8名）

1906（明治39年）日露戦勝記念林

薬師ヶ浦山に日露戦争の戦勝記念林として二反歩の松の植林を行う。

1908（明治41年）大神神社境内拡張（300坪）

競犁会、青年夜学校、めい卵採集

競犁会はいつ頃から開始されたのか、明治41年11月競犁会へ6円64銭の支出がある。青年夜学校への油代2円補助とあるのは、明治41年12月のこと
明治43年7月の採卵、捕蛾成績調査簿が有る。

上和白事績綴には6/5、6/12、6/19、6/30、7/6の5回にわたる螟虫採集の統計もある。

和白高等小学校創立

1900（明治33年）

和白高等小学校は青柳高等小学校の分校として発足した。その当時の校区は和白、立花、原上三代、下府、湊、新宮で上和白の大名地内に設立された。

和白高等小学校跡記念碑

記念碑が設立されている位置は、当時の高等小学校の正門に当り、当時は高さ3m、径40cmの花崗岩の石柱（2本）で造られた標札であった。

裏面碑文

「この地域は私たちの母校、和白高等小学校の跡地である。本校は、明治33年（1900年）に和白、香椎、新宮の各村と、立花村のうち原上、平山との組合立学校として創設され、当初は「大名」にあつたが、校運の発展に伴い梅ヶ崎山の北麓に移築されたものである。（現和白3丁目13番地内）

当時は、付近に人家も少なく白砂青松に囲まれ真に学園に相応しい環境であつたが、明治45年の教育制度の改革により、廃校になったものである。当時は粕屋郡に属し、郡内の高等小学校は、本校の外、青柳、久原、大川、宇美、箱崎の五校に過ぎなかつた。本校の存続期間は、僅か十三ヶ年に過ぎなかつたが、初代^{あお}栗生、二代^{あお}下川の両校長を初め諸先生の懇篤な薫陶により当校に学んだものは地域の先達として、其の発展に寄与し、又国家社会の有用な人材として活躍した者も少なくは無い。

廃校以来、ここに五十年、当地方の発展は特に目覚ましく当時を偲ぶ情景は全く消えうせ、うたた寂寥の感に堪えない所である。時あたかも明治百年の意義ある年を迎え、明治未年に姿を消した母校の存在を後世に伝えると共に、師恩に報い、失亡同窓の霊を慰め、併せて世人の学校教育に対する関心を喚起するため、ここに同窓生一同相謀り本記念碑を建設する所以である。

昭和43年11月11日 竣工

和白高等小学校卒業生 北畠菊蔵撰書」



和白高等小学校跡記念碑

上和白略年暦（2）

1913（大正2年）4月旧拝殿前石段奉納（初老賀7名）

1915（大正4年）5月高藤溜池増築工事開始

1916（大正5年）7月高藤溜池堤防大決壊

1917（大正6年）高藤溜池増築記念碑（10月吉日）

記念碑は当初、現在の和白東町内公民館の玄関あたりに建築されたが、昭和時代に神社境内へ移築。

このみ
許斐ガラス工場 創業

所在地 和白4丁目海岸通り

製品 ラムネびん、サイダーびん、一升びん

青松白砂の地で、原料も十分であったが、労働争議のため廃業となった由。



神社境内の祈念碑

1919（大正8年）大神神社御神殿、拝殿葺替（遷座祭）

1913～1920（大正2～9年）戦役記念碑

青島攻略（第一次世界大戦）、シベリヤ出兵等

1921（大正10年）上和白も点燈するか

和白駅前も点燈されていたことにつき、5月8日、明覚寺に集合して協議されたが、賛成少なく中止となった。上和白事績綴に電柱敷地料10ヵ年分18円也の記録があるが、その意味は不明。

1921（大正10年）「筑前新宮」駅名誕生

国鉄鹿児島本線、香椎駅まで複線工事が完成し、従来の呼称であった「信号所」を改め、待望の筑前新宮駅となった。（8月1日付）

1921（大正10年）宮の前橋架設記念碑（奉納上和白青年支会）

当初、氏神様に最も近い和白川上流に架設されていた石橋は、造成時に撤退。記念碑のみ境内地へ移設された。

1922（大正11年）貞島炭鉱売買 詳細は上和白事績綴を参照

1924（大正13年）5月22日新博多＝和白間開通

大正12年6月起工の和白＝宮地嶽間は、大正14年7月1日営業を開始。蒸気機関車が煙を吐いて走る。

1924（大正13年）消防創立。会計簿によると寄付金（大正13年5月）878円38銭（ハン

テン外)。

- 1925 (大正14年) 貴船神社、大神神社境内地へ
字立花1089と中和白大松よりの庚申塔二体を、境内地内へ。
61歳以上16名により遥拝台を建立
小林大右衛門、石燈籠を奉納
上和白少年団創立(4月)
- 1926 (大正15年) 6月しめ縄掛石(八尋弘次郎)
- 1927 (昭和2年) 7月手洗鉢大石奉納(寄進安河内宗吉)
上和白耕地整理事業
第一期工事完工(昭和2年9月)
第二期工事完工(昭和4年8月)
上和白耕地整理記念碑(昭和51年11月)建立
- 1928 (昭和3年) 村社へ昇格(神饌幣料受領)
御大典 記念祝賀会(11月15日)
渡殿修理・奉祝門・日籠り
- 1929 (昭和4年) 上和白公会堂建設
小学校旧校舎を購入(440円)収入計1,347円60銭也
- 1933 (昭和8年) 大神神社御神殿葺替
宮前畑地購入、宮鳥居前石段工事
- 1941 (昭和16年) 大水害及び大蔵溜池余水
- 1942 (昭和17年) 奈多新開堤防大決壊
- 1945 (昭和20年) 大神神社拝殿修理



大正時代(1913~1920)頃の氏神様



大正2年奉納の16段の石段



大正2年4月建立の記念碑



造成で埋没し始めた（昭和45年）



造成工事完工後の井戸跡、階段跡

1913（大正2年）奈多大火事（義損金）
4月旧拝殿前石段奉納（初老賀7名）
御影石16段、高さ3.2mの石段の
奉納。

それより約60年後の昭和45年に始まる
団地造成工事では、神社の里道（平山
みち）小金丸友吉氏の畑地を埋め、
更に参道、井戸、十六段の石段を埋め
尽くし、神社境内は平地同様の姿とな
った。



大神神社境内地

高藤溜池増築工事

1915（大正4年）

5月よりの増築工事を始め、翌大正5年2月28日に堤防土盛り終了。1荷（男4銭、女3銭）

堤防土盛り終了祝では、酒5升、干鰯2束、手拭25筋（婦人へ配布）

和白村 宛 粕屋郡長 廣辻信次郎
大正四年五月十八日
(土第七十六号)大正四年五月三日付ヲ以テ伺
ヒ溜池増築工事請負随意契約ノ件聞届ク。

豪雨のため高藤溜池堤防大決壊

1916（大正5年）豪雨のため高藤溜池堤防大決壊

「私が数え年7歳の時、大正5年は、6月22日には、田植えが終わり、青々と苗が元気になりかけていました。7月2日は俗に云う『ハゲ雨（半夏至）』の日で朝からドシャ降りの大雨でした。その真夜中、区長の安河内虎吉さん（和白東二丁目和彦氏の祖父）のおうちから、早太鼓がドンドンと鳴り渡りました（当時は、放送器具もサイレンも無い時代です）。『高藤の池が崩れた、大水ぞー』夜中のこと、大人の人だけで鍬やスコップ、唐鍬を持ち走って行かれました。7歳の私は翌朝、母について高藤の池まで行きましたが、高藤池の灌漑区域十数町歩は大海原と化し、池の堤防は切れて底が見えていました。『利右衛門さん（安河内英男氏の祖父、駄菓子屋さん）の家は、どうなっとるだろう』『流されとろう』の口々。利右衛門さんのお家は、只今の旧3号線とJR鹿兒島線の間、和白川の横でしたが、幸いにも国鉄の土堤のお陰で無事でした。

上和白の水田は、田植えのあとだけに、苗は流失、冠水ですし、今更に田植えの苗は無く、灌漑水路等の復旧作業と仕事が倍増しても、倒れて役に立つ苗は起こさねばならないので、和白小学校の上級生も先生と一緒に加勢して下さいました。

現在の上下の二段になった高藤の池は、高美台団地の造成のため、最早灌漑の要も無く、祖先の苦労も知らぬ気に、満々と水をたたえ、微風にさざ波を立て、静かな姿を見せています。」

[和白東一丁目在 小金丸友吉氏（故人）提供]

復旧へのご尽力下さった方々

- イ．空俵 80俵（下和白）182俵（三苫）93俵（塩浜）70俵（平山）90俵（奈多）
- ロ．加勢 唐原青年、下和白青年、塩浜青年、……。
- ハ．苗おこし 下和白、和白小学校、

復旧作業は困難を極める

- 1．大正6年4月30日より、土が無いために岩を持ち寄って砕いた。
 - 2．同年5月8日より、岩割作業人男女計39人とし、他は地搗き人とした。6月末になってやっと工事は終わった。
- 1917（大正6年）10月「字高藤溜池増築記念碑」字立花^{りゅうげ}の高台に建立。

その後、昭和2年耕地整理用に「字立花の高台」を切り崩したので、止むなく大神神社境内に移築。



底樋（そこひ＝溜池の水を放流するための管）

この木製の底樋は樹齢約70年の松の原木を縦割りにして、通水断面を箱状にくり抜き、替折釘（かいおれくぎ＝和釘の一種）を使って元の丸太に組み合わせた構造になっている。コンクリートパイプなど無い時代に、先人たちの底樋製作に対する工夫と溜池を大切にしてきた苦勞がうかがわれる。

2002年（平成14年）10月、福岡カンツリー倶楽部ゴルフ場内の高藤下池改修工事で取り替えられた一部。

（上和白大神神社境内に展示）

高藤国有林払下げ

1920（大正9年3月）

陳情書

従来、当上和白区の田畑灌漑用水に充当して
いた処、年々土砂の崩壊によって溜池の底土高まった
結果、用水量次第に不足し、本村三十町余の田畑への
用水不可能につき、高藤国有林の払下げ下されば……
云々

熊本大林区長 殿

上和白区民総代

以上、経緯のみ

名義変更

大正12年12月4日、国有林野法第8条第2号により、上和白村名義に売却許可あり、更に、監督官庁の売払い処分許可の暁は、上和白に変更可の由。

経理関係

（国有林払下げ分）6町5反3畝歩 価格 壹万壹千八百八円也

（支 払） 大正15年3月まで第3回に亘り納入のこと 上和白分8,304円30銭 平山
分2,783円70銭

（植 林） 松苗4,900本を3期に亘り植え付け

高藤国有林払下げ記念碑建立 大正12年12月

1927（昭和2年）上和白耕地整理事業

1927（昭和2年）米価下落に関し（村農会）米価、予想以上の下落の原因を解説し、この暴落の対処の方法は「我々農家自身の自重の外なし、この度、念のためご考察願いたく云々」

昭和2年8月13日 上和白村農会の文書あり

上和白耕地整理事業

耕地整理に関し事前協議

大正14年、県耕地課より、耕地整理実施の奨めがあった。当時は農道も水路も曲がり

くねって、農地の形も悪く道路に副っていない水田もあり、交通や耕作に苦勞も多かった。以上の事もあり、明覚寺の本堂で数回の協議の結果、関係農家の多数が賛成し、反対者は3人であったので実施することに決定した。[組合長 小金丸 鶴吉]

実施計画

施工期間 [昭和2年9月～昭和4年8月]

耕地面積は45町5畝歩で、出来るだけ、農作に影響しないように、地区を二工区に分け、第一期を国鉄線路から東方とし、字汐入、六反田、前田、長畑、浜田、浜久保、古賀堀、小田までとして工事着工、昭和2年9月工事完了。

第二期工事区を残りの字高原、宮前、裏田、大蔵、辺分野、佐山、高藤、八反田、高田とし、昭和4年8月、全て完工した。工事費は総額17,272円65銭。

工事現況

工事は、箱崎の藤原勝太郎氏が落札請負われ、毎日50人位の人夫が作業していた。作業は冬期に行われるので、菜種や麦の作付けが出来ないため、地元の人も作業に出て働いた。男子の日給は1円30銭、女子は1円であった。工事完了後は道路は直線、水路もそれに沿って、交通も耕作も非常に便利になり、百姓も皆喜んだ。



耕地整理の工事小字図

精 算

関係農家の負担は、直接工事費や借入金を合計して次の通りとなった。

工 事 費	17,272円65銭
借入金利息	7,839円94銭
計	25,112円59銭

農家に負担金が通知されたが、工事完了後の所有面積が減少した人、裕福な人は一時に

納入したが、現金の少ない人は、勸業銀行から借金して納入した。

借入金は10年賦償還で、毎年2月と8月に一定の元利金を償還する契約である。

時は既に、昭和初期の世界的大不況に突入していた。世の中は不景気になり貨幣価値は下がって、農家の収入も当然激減して生活も苦しくなったが、負担金の償還にも当てねばならず、上和白の農家は貧富の差が益々大きくなった。そのために没落した農家が数軒あったといわれている。

当時、他地区の人が「上和白は耕地整理をしたために村が枯れてしまった、果たして立ち直ることが出来るだろうか」と心配していたという話もあった。事業そのものは大成功したが、負担金の支払には大変苦勞をしている。

昭和14年12月償還完了

三苦区は耕地整理が終わってすぐに記念碑が建ったが、上和白区は資金欠乏で遂に記念碑は建たなかった。その記念碑も昭和51年11月に上和白農事会が主体となって、記念碑建設の計画が起こり、上和白財産組合が後援し、助成して、大神神社の境内に建設された。漸く上和白区の耕地整理事業が完遂された感じである。

なお、事業を始めた大正15年当時は45町歩あった農地も、現在は僅か7町歩余りに減少している。今も農地に点々とビルや住家が建てられているが、何れも道路に面した有利な宅地となっているのも、耕地整理が完成していたお陰である。先祖様や親のご恩に感謝すべきである。

参考（昭和初期の物価）

農地の価格坪当り6円～3円平均4円50銭
人夫の労働賃金（男）日当り 1円30銭
米 価1俵（60kg）当り 5円80銭
清 酒1升 当り 1円50銭



大神神社境内地の耕地整理記念碑

上和白の農業

上和白地区における水田の総面積は45町5畝歩であったが、字古賀堀付近の約3町歩が砂質壤土で、残り42町歩は粘土質壤土である。

粘土質水田の田鋤（牛馬で耕耘）や鋤仕事には随分苦勞があった。特に田鋤は、雨降りの後の足跡型に水が溜っている時くらいが耕耘しやすいので作業をしたが、午前中は作業ができて午後には乾燥して耕耘することが出来ないことが多かった。鋤先や鋤に付く粘土を落とすために板や竹で作った篋へらを腰に差していた。これを他所の人が見て「腰が痛くならないように尻に差しているのだろう」と笑っていたという。この粘土質の水田で収穫された米は品質が良く、味も美味しく、砂質田の米とは比較されぬほどの違いがあった。

粘土質の水田に植える稲は「三井神力」と云う品種で、収量は多かったが欠点としては草丈が伸びて人の身長くらいに長いことと、籾が落ちやすいので丁寧にやさしく扱わねばならないことであった。

古賀堀や二反田は、砂質土であっても粘土分が半分くらい混じていたので、米の品質が良く、農作業も仕易いので上和白の一等田として地価も高かった。

全くの砂地は字白浜で、ここでは「愛徳」と云う品種の稲を作っていた、この品種は見かけは良いが、食味は「三井神力」に較べ少し劣るようであった。

稲を作るのが表作といい、麦や菜種を作るのを裏作という。麦を蒔くには、土塊を細かく砕かねばならないので、粘土質の田では重労働となり、菜種ばかりを植えていた。

春、4月半ばになると見渡す限り菜種の花盛りとなり、黄金の籾を敷き詰めたように美しかった。明治から大正の初期の童謡に「田舎の四季」と題して次のような歌詞がある。「道を挟んで畑一面に 麦は穂が出る菜は花盛り 眠る蝶々飛び立つ雲雀 吹くや春風袂も軽く」

……上和白平野の春はまさしくこの歌の通りであった。

また、農耕作の外に「養蚕」も盛んで、農家にとって最高の収入源であったが、非常に労働力を必要とした。なかでも蚕の上蔭期かいに じょうぞくきが菜種や麦が熟れて収穫の時期と重複するので、蚕の上蔭期は家族全員が不眠不休、数時間眠るだけの多忙なときであった。

休む暇もなく、すぐに田植えの準備にかかるので、麦、菜種を収穫した後の田返し、畝戻し、田植えのための代掻き、粘土質の土塊は「まが」で四回掻かねば田植えが出来なかった。このように上和白の農家は、和白村の中では一段と多忙を極めたのである。

（和白東一丁目 小金丸友吉氏（故人）提供）

参考 上蔭期じょうぞくき……十分に成長いた蚕を繭を作らせるため蔭に入れる時期

上和白大水害及び大蔵池余水

1941（昭和16年）

（上申）

4月以来、降雨連続し、6月に至っては降雨一層激しく、各溜池満水となり、加えて大蔵溜池のアマシ（余水）流れ来て、一時は水が鹿児島本線の路線に及び、列車が運行出来ず、田植えも不可につき、来駕指導方よろしく、

県耕地課に上申、県池浦技師指導の下、

字高原の河川（和白川の上流）改修 工事支出計1,241円13銭也

大蔵溜池の余水について

平山、夜臼、下府との交渉（5ヶ条の覚書交換-昭和17年3月5日）

植林 松苗4,900本、杉苗650本

1942（昭和17年）大風高潮による新開堤防決壊

9月 大風に高潮も加わり新開の畑地一面海と化す、上和白からも奉仕活動に出勤する。

終戦前後

1944（昭和19年）

9月 雁の巢勤労奉仕、

10月 馬糧荷造り

12月 ヒマの栽培

1945（昭和20年）

5月 公会堂へ（海軍施設部駐屯）

9月 罐詰、特配米の分配、食料払下げ（赤城工兵隊）……終戦直後の月

10月 進駐部隊へ人夫 66人 19回

11月 " 106人 26回

12月 " 30人 15回

" 月 米供出割当て（278石2斗）

1946（昭和21年）

2月 進駐部隊へ人夫 12人 7回

和白ゴルフ場

1951（昭和26年）

所在地 福岡市東区上和白1318-1

名称 株式会社福岡カントリー倶楽部 和白コース

面積 約20万坪（67ヘクタール）

コース

COURSE	HOLE	LENGTH		PAR
		YARD	MATER	
アウト	9ホール	3293	2994	36
イン	9ホール	3367	3086	36
計	18ホール	6660	6080	72

戦後ゴルフが復活すると、上和白の山林原野がゴルフ場の候補地となり、開拓団入植地をも含め1951年（昭和26年）7月地主代表である和白村長白石三平氏と用地買収の妥結をみた。

大成建設（株）福岡支店が建設工事を担当し、同年9月1日着工、翌52年11月10日に、アウト9ホール（現在のインコース）が仮オープンした。この日は現天皇陛下の立太子礼（すなわち成人式）が行われた日で印象深い日となった。

1953年（昭和28年）11月3日にはイン9ホール（現在のアウトコース）が完成し、18ホールオープンの開場式典が挙行された。元来、雑木林であった上和白の土地は、戦後のゴルフ場としては立派なゴルフコースとなった。

現在では住宅団地に囲まれ、交通の便は非常に良く豊かな自然が温存されている。場内は人為的に多様な樹種が植栽され、四季にはそれぞれの樹相を飾っている。また、和白干潟やアイランドシティ（人工島）、海の中道大橋など眺めはすばらしく、都会のオアシス的存在となっている。

1973年（昭和48年）からはKBCオーガスタゴルフトーナメントが実施され、1982年（昭和57年）まで10回開催された。国内はもちろん国外にまで「和白」の名を高めたチャンピオンコースである。



和白ゴルフ場

和白東校区

1976年（昭和51年）

福岡市の最東部に位置し、西は博多湾と玄海灘をのぞみ日本有数の渡り鳥の飛来地の和白干潟を埋め立てて401haの人工島（アイランドシティ）の計画が進行している。東は歴史を綴る筑前の名山の一つとも云われる立花山（標高367m）があり丘陵地を含む水田農業地帯であった。

JR博多駅が大博通り祇園町から現在地点に移転した昭和38年頃から、高度成長の波に乗り和白地域にも企業の進出と共に高美台団地の宅地振興が進んだ。急速な人口増に伴い1976年（昭和51年4月）児童増により和白小学校から分離し、福岡市の102番目の小学校として開校、同時に自治連合会も発足した。

1. 世帯数、人口

「高美台の宅地造成」について

1959年～1974年（昭和34年～49年）にかけて（地権者60名）買収が行われた。

1963年（昭和38年）世帯数：657戸 人口：1,158名

1973年（昭和48年）高美台団地第一次計画建設～昭和62年 第六次計画建設

1978年（昭和53年）世帯数：2,678戸 人口：7,891名

2000年（平成12年）世帯数：4,836戸 人口：12,581名

2004年（平成16年）世帯数：5,009戸 人口：12,517名

2005年現在、18町内、202組 一戸建てと高層住宅が混在した地域である。

2. 「和白東」の名称由来

1976年（昭和51年4月）和白小学校より分かれ、福岡市立和白東小学校として開校した。

小学校の校名をどうするかについて、色々な意見が続出し、「高美台」と「和白東」に意見が分かれたが、最終的には、知名度が高く歴史のある「和白」の地名を生かし、その東に位置するという意味で「和白東小学校」の名が誕生した。

3. 「高美台」の名称由来

この地域は「大字上和白字高見」であったので、この「高見」をとって「見」を「美」に変えて高美台となった。

4. 町名

和白東校区自治連合会（当初は12町内、現在では18町内）

1979年（昭和54年）頃の町名

上和白1区・東和白2区（後に東和白2区と3区に分かれる）・下和白2区（和白台）・福工大寮・高美台1丁目1区・高美台1丁目2区・高美台2丁目1区・高美台2丁目2区・高美台3丁目1区・高美台3丁目2区・高美台4丁目1区・古賀掘

1989年（昭和59年）2月、町名と住居表示の変更

上和白1区（和白東一丁目1区と和白東二丁目に分かれる）古賀掘（和白東一丁目2区）エメラルド（和白東一丁目3区）和白台（和白東三丁目1区）福工大寮（和白東三丁目2区）東和白2区（和白東四丁目）東和白3区（和白東五丁目）

2005年現在18町内

上記のほかに、和白東一丁目4区、高美台一丁目3区、高美台二丁目3区、高美台四丁目2区

福工大寮（和白東三丁目2区）は校区外に移転し削除。

和白東の沿革

1976. 4.（昭和51年）福岡市立和白東小学校開校（市内130番目）

和白東校区自治連合会 発足

1978. 4.（昭和53年）福岡市和白東公民館 開館（市内83番目80坪館）



昭和53年4月 開館当時の和白東公民館

2001. 7. (平成13年) 新公民館150坪館竣工

2001. 9. (平成13年) 和白東「公民館・老人いこいの家」複合施設 落成式



平成13年「和白東公民館・老人いこいの家」複合施設



昭和46年10月(上和白団地造成決る)



昭和54年10月26日の和白東地区

史伝、口伝、風物詩

千丁松明

[小金丸文書・塩浜古老の話]

永禄11年7月、立花城落城、立花鑑載自刃。原田、斎藤、清水は辛くも脱出して中国に渡り、再起を謀った。大友方は立花城に三将を置いて守らせ、各将を各所に配して高橋に味方する付近の土豪を討伐した。

永禄11年8月、敗戦の将、原田、衛藤は立花城を奪回しようと攻めかかる。[中略] 毛利勢各所で敗られ、同年8月、毛利の清水左近将監は辛うじて新宮の浜より船で長門（山口県）へ落ちのびた。（筑前戦国史より）

「立花城と申すは、筑前第一の要害の城なり。駒の足立悪しき故、攻め寄せ難きにより、この海辺、下和白の内、桂ヶ崎山へ立籠るによって、これを陣の山と云うなり。しばらく見合いのうち、道雪公、大きに怒り給い、桂ヶ崎に籠りたる中国勢を退散させんと、所々の風上へ、ハトタ水を流し、上和白海辺要害の良きところに出城を築き、勢を引き連れ討ち取らんと立花勢討って出る。ここを今に立花屋敷と云うなり。

また、中国勢、桂ヶ崎山より山麓の地蔵森浜の廣野にて合戦となり、立花勢、粉骨碎身戦かえば、中国勢数百人討ち死に、この跡、塚多し、之によりて塚原山と云うなり。

今に至るまで、秋雨降る夜、一カ年に、一、二夜も桂ヶ崎山の麓より塚原山まで『千丁松明（センチョウタイマツ）』と申して所々火多く続くなり。この火近くより見えず、この立花屋敷より能く見え候なり。誠に、その時の中国勢の念火と云う」

吉永正春氏の筑前戦国史によれば、毛利方の清水の率いる水軍は、新宮の浜より上陸し、相の浦山より立花城をうかがったと思われる。平成の今日でも尚、怪事件ありと聞く。

りゅうげ（立花）

真夏の昼下がり、玄界灘から吹き渡る汐風、三苦、塩浜、下和白の稲田を波打ちながら吹きあがる「リュウゲ」坂。大正10年（約70年前）ごろの私ども農家の人達は、大樹の下に三々五々集まってきて、午後2時半ごろまで、寝ころび又は語り合った懐かしい思い出の高台であった。

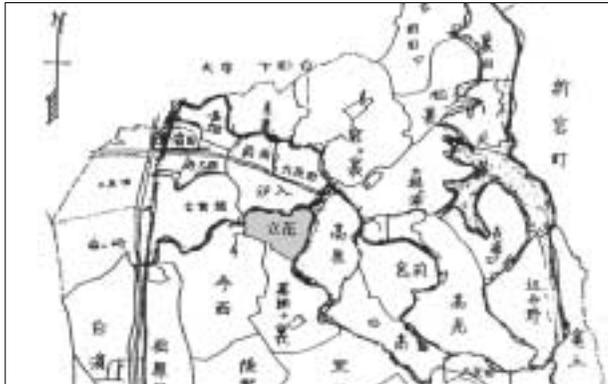
小金丸友吉氏懐古談にあるように、昭和初年には出城の姿殆どなく立花井のみ残っていた。

慶長5年（1600年）黒田長政、和白の地も検使させ、立花の地を「百姓居屋敷」と認められる。

この間、1600～1861（文久元年）の約260年間、宿陣のところ、出城は私どもの、所謂、

リュウゲ坂ではなく、「小金丸重三氏邸（文久元年〔1861年〕新築）」「小金丸三六氏邸（文政5年〔1822年〕組頭役）」の高台上、及び正保4年（1647年）移転造営の明覚寺地の台地と想定すべきと思われる。

正しくは「字立花」は要害と見られるか、今西の谷池 立花（重三氏居宅地） 龍華山明覚寺 貴船神社地は、殆ど「字立花」の地である。



東区上和白立花（リュウゲ）位置図



- A 和白東1,2公民館
- B 立花井
- C 小金丸重三氏宅
- D 小金丸三六氏宅
- E 明覚寺
- F 貴船宮跡

東区上和白字立花（リュウゲ）坂周辺図



和白東1.2区公民館、右小金丸宅

上和白古墳

特徴

磐井の反乱後、設置される粕屋屯倉の外縁部に当たる上和白古墳群の被葬者は、世襲の家父長集団ではなく、何らかの軍事的性格をもつ武人の墓と判断される。あたかも対朝鮮交渉の深まる6世紀中葉を境にして、和白地域の後期古墳群の造成が始まり、然も古墳出土の馬具は簡素で、より実戦的である。(市文化課報告)

上和白製鉄遺跡

位置

旧大神神社(団地造成前)正面参道左側畑地。

古墳時代終末期から奈良時代にかけての鉄生産段階を示す製鉄機構が発掘され、精錬炉外スケール、砥石、鑛滓も発見された。更に、製鉄機構に隣接して竪穴住居が認められ、当時の工人の居住場が同一場所にある遺跡は珍しい由。



製鉄跡の位置図、右上大神神社



製鉄跡地の発掘

和白出土の青磁

中世の時代になると、大陸との盛んな交流を物語る資料がある。上和白包合地及び古墳出土の青磁類は、南宋諸窯（同安、龍泉、越州）が数多い。中世の一時期、大宰府官人層の暴挙が目立ち、那津から今津へ貿易港を移すの時期、香椎から和白の入江にも宋船の出入りがあったのかも知れない。

寛弘5年（1008）宋銘の貨幣出土

宋（中国）銘の貨幣「祥符元宝」が字古賀堀の畑地から発見された。更に団地造成の際、発掘の「製鉄跡」からも、9世紀頃の青磁が発見された。少なくとも西暦1000年の頃までは、海岸線が大神神社の近くまであり、宋船が古賀堀近くで交易していた。市の文化課も、そう考えたい由。

（以上、福岡市教育委員会発行の「和白遺跡群」の本から）

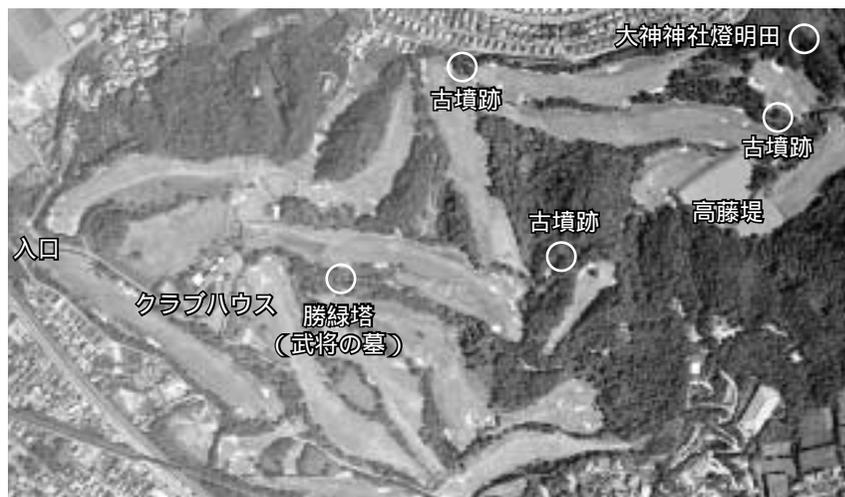
市文化課の話では、今から約700年から1200年までの「上和白付近の様子」がわかるとのこと。

和白ゴルフ場内の古墳

ゴルフ場造成前の地番は大字上和白字高藤といい、高藤山連山の左端山頂に一基現存しており、ゴルフ場8番コースのティーランド横に古墳の標示がしてある。

大字上和白字野地地内（旧字名）現在は、3番コースのグリーン付近に一基と野地の南側山頂、2番コースのグリーン手前右側の山に一基、以上計3基の古墳が発見されている。

ゴルフ場では、古墳に関わる武将の御霊を祀る「勝緑塔」を昭和58年4月1日建立し、毎年春の彼岸に供養祭が行われている。



福岡カントリー倶楽部 和白ゴルフ場

上和白少年団

パッパカーパー・パッカアパッパーと高声、奇声のラッパ声。早くも日曜日というのに、今なお暗い上和白の空に鳴り渡る。

「今日は松原（和白1.2区）組ばい！早よう起きなあ」松原から氏神様まで約1.5キロメートル。全員拝殿に座りご神殿に拝し終っても、未だ午前4時。暗やみでは掃除も出来ぬと、例の通り、拝殿の板張りで「馬のり」「馬けり」「陣取り」。寝不足よりも、この面白さ、平成の今日尚思い出すも懐かしい限り。

われわれ、上和白少年団の創設は大正14年、時の高等科二年生の最上級は、船越幹一（フミエさんの叔父）さん、小金丸寛二（鶴視氏の父上）さんは早や故人。相場金次郎（ツネキさんの兄）さん、船越信一（ミツエさんの主人）さんの4人。毎日曜日はお宮、ひと月一回はお寺の庭掃除、時には道掃除と後輩を楽しませながらの指導、誠に有難うございました。そのお陰か、上和白村事蹟綴に、昭和28年まで「少年団へ300円補助金」の記録がある。

創設年の大正14年（1925年）より昭和28年（1953年）までの約30年、終戦時にもめげずの努力、誠にうれしく筆にしてみた。

めいらん（螟卵）採集の思い出

6月10日ごろになると、稲の苗が10センチ以上に伸び、その苗に、蛾がめい卵を生み付ける。田植え前に大急ぎで取ってやらないと、稲に大被害を与える。

そこで私たち4年、5年、6年生の上級生は、一週間に必ず一回、午後の勉強を取り止めて農家の応援に、奈多、三苦、塩浜、下和白、上和白の苗床へ、組分けして全員採集に出かけた。

螟卵 螟虫（メイチュウ）の卵。螟虫は昆虫で、蛾が稲の苗の葉に卵を生みつける。卵から螟虫が生まれると、稲の茎の中に入って、中から喰い荒らし、米を取れなくする。

農家では5月に米の種子（籾）を、長方形に作った苗床に蒔いて苗を作り、6月10日過ぎになると10センチ以上の苗が、数十万本に育つ。

螟卵は1000～2000本のうちの1本位の割合であり、見つけるのは大変だが、私どもは竹さお等で工夫して探し出していた。

苗床には水がたっぷりあり、メダカ、カエル、ヒルがいる。知らぬ間にヒルが足に吸いついて、私どもの足の血を吸うと大変。特に女子は泣かんばかりにキャキャと騒いでいた。

終わったら目当ての山へ山桃食べに走ったものである。

「農は国の大本なり」という。大正から昭和20年代ごろは、このように農家の手伝いなどして、勉学と勤労と社会奉仕の精神を養われるうちに、更に労働の苦労などを味わったものだった。いずれ漁業への参加もまた紹介したい。

以上のように小学校の生徒が、農家のためよく努めてくれたので、区長や役場から御ほうびが、めい卵採集の本数に応じて出た。みんなも頑張っ、家に帰ってからも採集して持って行ったものだった。

蛍狩り

筑紫野の夕空を焦がす「カラシ焼き」がすみ、麦の収穫が終る頃になると、和白川に蛍が出始める。

夕方、暗くなりかけると、二反田や駅前の子供たちが蛍取りに集まってくる。和白川の兩岸の草藪の中に、ボンヤリと黄緑色の蛍の尻が点滅する。その怪しげな光を追って子供たちが手で押さえる。あっちにも、こっちにも光はじめる。しばらくの間、子供たちは夢中になって兩岸を走り回る。そして何匹かの蛍を取ると、

ホーホー蛍こい そっちの水は辛いぞ
 こっちの水は甘いぞ ホーホー蛍こい

と歌いながら帰って行く。

春の小川

「さようなら」そう言って和白小学校の校門を出て、お庚申さまの大松の下から百m、五丁川のミカゲ石の手摺りのない石橋に腰をかける。

春の小川は サラサラ流る……

五丁川の水は、静かにわずかに水藻をゆすって流れている。水スマシが大きな輪を描いてスイスイ、めだかが五匹か七匹か、かたまって泳いでくる。「静かに…しずかに…」メダカの下の方に鮒が！春の午後の日ざしは、肩に、背中に、ボカホカと。「オレのかけぼうしが…そらー、お前も…」その頭の上近く、白雲が静かに動いて行く。

「帰って、サカナとりに行こう……」

和白の晩春

桜の花が散る4月半ばから5月への一ヵ月間、和白平野（約15町歩）は、見渡す限りの千畳敷、万畳敷の黄色の絨毯におおわれる。花から花への蜜蜂さながら、菜種（カラシ）の花のトンネルを花粉にまみれながら、畝溝を走り抜けた小学生のあの頃、詩情豊かな田園風景が良く見られたものである。

それから間もなく、5月末から6月にかけて菜種の収穫期を迎える。和白平野の作付けは、カラシ畑が2/3、麦畑、レンゲ畑が1/3位であった。

刈り倒されて畝に干されたカラシ粗朶は、子供の背丈以上はあり、田圃一杯に干される。その後、はじけるようになった頃、田圃の一部に箆を何枚もつなぎ広げて、その上にカラシ粗朶を担ぎ集めて一気に実を揉むようにして、或いは、叩き落すようにして取るのである。

陽が西に落ち暗くなる頃、カラシ揉みは終わる。そのカラシ殻は小山のように田圃の中に集められ、それに火をつける。パリ、パリ、パリと激しい音を立てて燃え、梅雨の曇り空を焦がすような感じで燃え上がるのである。

和白の詩情豊かな田園風景は、梅雨の空を焦がしつつ田植えの時期に入る。

参 考 文 献

1. 上和白事蹟綴り (27冊)
2. 地 券 (上和白村、30枚)
3. 大神神社事蹟綴り (20冊)
4. 小金丸文書
5. 和白遺跡群 (福岡市教育委員会)
6. 郷土の社寺物語
7. ふるさと和白 (郷土の竹槍一揆)
8. ふるさとのむかし (第二集) 石像物編
9. ふる里のむかし (第三集) 和白塩編
10. 粕屋郡志
11. 筑前戦国史 (吉永正春)
12. 戸次道雪・高橋紹運 (九州出版社)
13. 大神神社 (中山和敬)
14. 筑前国続風土記 (貝原益軒)
15. 日本書紀 (神功皇后、齋明天皇)
16. 太宰管内志 (伊藤常足)
17. その他